

マスター

三垂縫衣

桜が散った木は無数の青々とした葉をつけていた。数年前に引きこもった兄は、まだ部屋から出てこない。初めは献身的に声をかけていた両親も、今ではすっかり諦めてしまった。気にかけてないわけではないが、これ以上は無駄だと悟ったようだった。兄からしたら部屋の外が静かになって、かえってよかったのかもしれない。しかし僕は兄の部屋を通り過ぎるとき、わざと音楽を流すことを続けている。兄が音楽を聞いてひよっこり出てこないだろうか、なんて思いながら。もしかしたら、兄はこれをうざったく感じているかもしれないけど。

「俺はいつか、最強のロボを造るんだ」

子どもながら大人を凌駕するほどの天才だった兄は、かつてそう言った。僕は目をきらきらさせて、兄が書いた設計図を見ていた。僕は兄ほど優秀ではなかったため、兄が思い描いた最強のロボとはなんなのかよくわからなかった。直線が機織りみたいに並ぶ設計図の内容を、理解することはできなかった。多分、今見ても三割くらいしかわからない。けど、きつと人々の支えになるような、素晴らしいものに違いない。僕はそう信じた。

今日は『デイジーベル』という曲を流すことにした。どうやら機械が始めて歌った曲らしい。それはボーカロイド等の前身とされ、初音ミクのお爺ちゃんなんて言われていたりするという。兄は機械に精通している。その歴史なども熟知しているかはわからないが、この曲をネットで見つけたとき、兄が反応してくれるかもしれないと思ったのだ。僕は自然に、曲をデイジーベルに切り替えて階段を登った。僕は、兄の部屋の前を通り過ぎた。兄が扉を開くかもしれないときどきして、スマホを持つ手が汗ばむ。だが、兄が出てくることはなかった。やはり、兄の心を動かすことは無理なのだろうか。

「あ、あのう、それって……」

自室のドアノブに手をかけたとき、扉が開く音がした。僕の部屋じゃない。はっとして兄の部屋の方を向くと、僕よりも少し背が高い女の子がいた。僕は警戒して彼女を睨みつけた。

「だ、誰ですか」

「わわ、ワタシ、怪しいものじゃありません」

彼女は今にも泣きそうな顔をした。数年閉ざされていた部屋から得体の知れない女性が出てきたら、そりや怪しすぎるだろう。僕は疑いの目を向けたまま彼女を問い詰める。

「誰」

「う、ウブネです。あなたは、マスターの弟さんですよね」

マスターとは、おそらく兄のことだろう。兄のことをなぜマスターと呼んでいるのかわからないが、ある一つの可能性が閃く。彼女は、兄が造ったロボなのではないか。それにしても話し方は流暢だし、姿形も人間そっくりだ。人間離れしているところと言えば、髪が綿雲のような色をしていて、目が満月みたいな色をしているところくらいだ。それを差し引いても、やはりロボには見えない。不気味の谷を感じさせないその姿や立ち振る舞い。兄はどうやって彼女を造ったのだろう。

「……兄は」

僕は警戒を解き、彼女に問いかける。

「マスターは眠っています。今まではほとんど寝ずに、ワタシの調整をしていましたから」

兄の部屋を覗こうと彼女に近づくと、止められた。もう少しだけ寝かせてあげてください、と言いたげに彼女は首を振る。ようやく、兄の顔を見たり、兄の声を聞いたりできるチャンスだったのに。彼女の言葉が正しいのであれば、この数年はほとんど寝ずに彼女の開発を行っていたことになる。それなら寝かせておくのが正しい。兄が目を覚ましたときに備えて、彼女に伝言を残しておくことにした。

「ウブネ、さん。兄が起きたら……一緒にご飯を食べようと伝えてください」

「もちろんです」

彼女は頷くのを見て、僕は自室に入った。兄の部屋は再び、閉ざされた。父さんと母さんに今のことを伝えるか迷ったが、かえって混乱させてしまう可能性がある。兄が部屋から出てきて父さんと母さんに話すまで、僕はこのことを秘密にしておくことにした。

「優磨、ご飯よ」

母さんが呼ぶ声がして階段を降りる。今日の夕飯は、兄の大好物である回鍋肉だった。

物音で目を覚ます。スマホで時刻を確認すると、朝の六時だった。せっかくの休日なのに、誰が物音を立ててるのだろう、と起き上がる。

「あ、ユウマさん。おはようございます」

「……なに、してるんですか」

寝ぼけた頭は上手く回らない。糸が絡まった扇風機みたいな感じだ。綿雲のような色の髪と満月みたいな目。ああ、兄が造ったかもしれないロボだ。名前は確か、ウブネさん。ウブネさんは、僕の部屋にある本棚から様々な本を取り出していた。兄はウブネさんにプライバシーというのをプログラムしなか

ったのか。寝起きの僕には怒る気力なんてなかったし、漁られて困る物も特になかったので、僕は軽くため息をついてもう一度布団に包まった。

「あのつ、ま、マスターからユウマさんを起こすように言われて」

彼女は慌てて本棚の中身を元通りにした。僕は布団から顔を少し出す。

「……じゃあ、なぜ僕の部屋を漁ってるんですか」「あ、えつと……ユウマさんはどんな本をお読みになっているか、気になってしまつて……」

彼女は僕の本棚をちらちら見ていた。そんなに面白い本があつただろうか。本棚に入ってる漫画といえば『はたらく細胞』と『コウノトリ』。小説は父さんから譲ってもらつたミステリー小説。最近流行りの漫画を買っていないので、新鮮味に欠けるかもしれない。

というか彼女は、兄に命令された以外のこともやつてしまうのか。しかし、ロボが自ら何かに興味を示すなんてことあるのだろうか。だって、ロボの中心は人間がプログラムして決めるものだ。人間みたいに、好奇心なんて持つわけじゃないか。彼女はしょんぼりした顔のまま、本棚の近くに正座していた。

「優磨」

数年ぶりに聞く声がした。慌てて起き上がつて扉の方を見ると、兄が立つていた。兄の顔は暗く、目の下にはひどいクマがあつた。髭がまばらに生えていて、髪もかなり伸びていたが、変わり果ててはいなかった。最後に見た兄の姿より、少しくたびれたくらいだ。

「に、いさん」

「ご飯、食べに行こう」

兄はくしゃつと笑つた。僕は飛び起きて身支度をした。僕が歯磨きをする横で、兄が髭を剃っていた。

「マスター、お洋服の準備ができました」

ウブネさんは洗面所の扉からひよつこり顔を出して言った。

「助かるよ」

兄がにこやかに礼を告げると、ウブネさんは嬉しそうに洗面所から離れて行つた。おそらく、兄の部屋に戻つた。起きて来た母さんや父さんと出会したら、厄介なことになるからだろう。

「ねえ……ウブネさんって何者？　兄さんが造つたんだよね？」

うがいをしてから、僕は思い切つて聞いてみた。兄は髭を剃り終え、顔を化粧水と乳液で保湿する。

「そう。俺が造つた。だから部屋にこもつてたのは別に、病氣とかじゃないんだ」

父さんと母さんは、兄を部屋から引つ張り出して、ありとあらゆる病院で検査をしようと試みていた。何かの病気なんじゃないか、学校で何かあったんじゃないか、と日夜話し合っていた。結局兄は部屋から出てくることはなく、診察も検査も受けることはなかった。家に誰もいない時間帯に冷凍食品を食べていた痕跡があったため、様子を見る方向にシフトした。

「それなら、部屋から出てきてもよかったじゃん」
元氣だったなら、父さんと母さんに顔を見せてくれればよかったのに。そうしたら、父さんと母さんは胃を痛めるほど心配しなくて済んだじゃないか。僕はちよつと頭に血が昇ってしまった。

「それは申し訳ないと思ってる。けど、やらなくちゃいけないことだったんだ」

「ウブネさんの開発が？ 家族より？」

「……長い目で見たら、ウブネの開発の方が優先すべき事項だった」

兄は目を伏せて言った。水を思いつきりかけてやりたいところだったが、必死で堪えた。兄も別に、家族を蔑ろにしたわけじゃない。ウブネさんの開発が終わったいま、こうして部屋から出てきてくれている。物事に夢中で打ち込む性格なのも知っている。兄は天才なのだから、ウブネさんの開発が一大

事だったことは正しいのだろう。

「隣のレストランにモーニングを食べに行くから、大人しめの服で頼むよ」

洗面所を出ていく僕に、兄は言った。だからこの時間に起こされたのか。ちよつとゲンナリしつつ、兄との久々の食事にワクワクしている自分もいた。

隣町まではバスで一本だ。家の近くにある営業所から乗って、兄がボタンを押したところで降りた。バス停からレストランまでは歩いて十分くらいだった。兄と移動している間は、ほとんど話さなかった。なぜかウブネさんも着いて来たので、ますます話にくかったのだ。ウブネさんはスーツを着て、髪の毛をお団子にまとめていた。まるで兄の秘書みたいだと思った。

「ここだよ」

兄が立ち止まった建物を見上げると、豪勢なホテルがあった。僕は思わず身震いをしてしまった。こんなに大きくて煌びやかなホテルは、家族とも来たことがない。兄さんは一体なぜこんなに高そうなところを予約したのだろう。そのお金はどこから出てるのだろう。もしかして、僕の貯金から払おうとしてるのか。

「間違っていない、よね？」

念のため確認する。兄はなぜそんなことを聞くんだ、と言いたげな顔で首を傾げる、

「ここで間違いないよ」

入ろう、と言つて、ピカピカに磨かれたガラス戸の向こうへと兄は進んでいく。僕とウブネさんも後に続いた。入り口からカウンターまではレッドカーペットが敷かれていた。ここで待つて、と言われたのでウブネさんと一緒に待つことになった。兄はカウンターで受付をしていた。一体一泊いくらくらいするのだらう、と考えを巡らせる。ウブネさんは兄を見守っていた。しばらくして兄がホテルスタッフを連れて戻つて来ると、ホテル内のレストランに案内された。僕はただ、兄の後ろを歩いていた。ウブネさんは凜とした表情をしていた。昨日も今朝も、あんなに泣きそうな顔をしていたのに。カウンターからレストランまでの道のりにもレッドカーペットが敷かれており、照明は全てシャンデリアだった。ギリギリしているのに全く下品ではなかった。ついキョロキョロしてしまつて落ち着かなかった。

「こちらにお掛けください」

木枠に美しいステンドグラスがはめられたパーティーションに囲まれているテーブル席に案内され、僕と兄は向かい合うようにして座った。ウブネさんは僕たちが座ったあと、兄の隣に座った。ホテルのレ

스토랑内にはまばらに人がいて、それぞれが料理を楽しんでいた。中には幼稚園くらいの女の子もいて、僕より大人しく座っていた。

「本日のメニューでございます」

ウェイトレスが一枚の紙をスッと差し出して来た。メニューを読んでみたが、異国の言葉みたいなカタカナの羅列ばかりだった。僕は思わず口をポカンと開けてしまいそうだったが、失礼かもしれないので堪えた。

「優磨はどうする」

「え、ええと……」

兄に言われて再びメニューを凝視する。どのメニューを見ても、どんな料理が出て来るのか想像がつかない。無難に本日のモーニングセットを注文するのがよいだろうか。

「決めた」

僕が顔を挙げると、兄はウェイトレスに合図を送た。兄が頼んだものはほとんど聞き取れなかった。スターバックスコーヒーに初めて行つた時と同じ気持ちになった。僕は緊張しながら本日のモーニングセットを注文した。コーヒーには砂糖とミルクはつけてしますか、と聞かれて固まつてしまう。これって何かの罠だったりするのかな。けど、あまりにも苦くて飲み干せなかったら元も子もない。僕はこく

りと頷いた。ウブネさんは何も注文しなかった。

「で、ウブネのことなんだけど」

ウエイトレスが注文を受理すると、兄は話し始めた。

「一大プロジェクトなんだ。人とロボを繋ぐ」

「人と、ロボを？」

何を言っているのかよくわからなかった。人とロボが繋がってどうするんだ。今のままだやダメなのか。全てのロボが、ウブネさんみたいに人間さながらの感情を持ち始めたとしたら、どうだろう。壮大な話すぎて頭がパンクしてしまいそうだった。兄は、何を企んでいるのだろう。

「ここからは、ワタシが説明します」

「ああ。頼むよ。俺から言うのと誤解を生みそうだ」

兄は苦笑した。確かに兄は口下手だ。いつも大事なことを抜かして会話する。多くを語らないのはカッコいいし、真似している部分でもあるが、せめて家族の前では全てを話せるようになってほしい。

「マスターは、pulse 社との共同開発を行っていたんです。プロジェクト名は『pulse-ing』。そしてワタシ……U-bune が開発されました」

ワタシを含むアンドロイドシリーズ『pulse-doll』は今後、世界中で活用される予定です。活用方法は主に生活のサポート。オプシヨンのプログラムを搭

載すれば、介護や看護等を行うことも可能です。保育の現場でも活躍予定なんですよ。人手不足の現状を覆す、画期的なプロジェクトなんです。

また、ワタシたちには人間同様、感情と思考回路が搭載されています。これが「人とロボを繋ぐ」機能なんです。ワタシたちは可能な限りみなさんを理解しようとしています。共感しようします。従来のおはなしロボットよりも遥かに高性能ですから、カウンセリングも可能なんですよ。もちろん犯罪や自殺等の幫助は禁止されていて、検知され次第強制的にシャットダウン、内容は本部に通報されます。こうした倫理や道徳のインプットが課題となっていないが……近い将来、ワタシたちが街を当たり前に歩くようになります。今日のワタシとマスターのように、です。

「要するに、長年科学者の夢だった人型ロボットが様々な現場で実用化される、ということですよ。マスターはその研究と開発に、数年間尽力していたんですよ」

ウブネさんはにこやかに微笑んだ。僕は彼女の話に聞き入っていたが、内容はほとんど理解できなかった。最後のまとめでようやく、半分くらい理解できた。

「ということだ。これからはウブネを実用化するた

めのプロジェクトに移行する予定なんだ。また忙しくはなるけど……もう、家族と壁を作ったりなんかしないよ」

兄は申し訳なさそうに笑った。僕はただ、はあ、と頷くことしかできなかった。ウエイトレスが料理を運んで来るのに札を言いながら、ウブネさんを見ていた。彼女は感情豊かで、表情豊かで、本当に人間みたいだ。思考の性能は人間と同様と言っていたけど、正直人間より人間らしい。これが、当たり前前に街を歩くようになるのか。

「冷めてしまいますよ」

ウブネさんに言われて慌ててナイフとフォークを手取る。テーブルマナーとか、全く知らないけど大丈夫だろうか。ウエイトレスが程よく徘徊しているため、下手なことはできない。かと言ってぎこちなく食べるのも失礼に感じる。

「気にせず好きに食べなよ」

兄はそう言って、何かのペーストを口に運んだ。

緑色だけど、青豆とかだろうか。ほうれん草のリゾットの可能性もある。しかし、メニューにはそんな記載はなかった。一体何を食べているのだろう。

「いや、でも……こんな高そうところ、初めてだから」

僕は皿に盛り付けられたソーセージを、ナイフと

フォークを使って切った。できるだけ音を立てないように気をつけたが、無音にはできなかった。

「ああ……はは、ごめんな。素敵な朝を送れたらと思っただが」

兄はコーヒを一口飲んだ。僕とは違ってブラックだった。

「べ、別に文句があるわけじゃないんだ！　すごく美味しそうだし、またこうして兄さんとご飯を食べれて嬉しい。ただ……緊張しちゃうなって」

先程一口大に切ったソーセージを口に運んだ。バジルのような、香草の匂いがした。初めて食べる味に戸惑ったが、間違いなく、美味しいものだった。大人の味と言うのだろうか。

「優磨はやさしいね。俺とは大違いだ。次は、そうだな……コメダ珈琲とかに行こう」

兄は目を伏せた。俺とは大違いって、どういう意味だろう。兄はいつでも優しく……まあ、家族をほっぽって研究に没頭しちゃうところはあるけれど。兄はやさしくないわけではない。むしろ、立派な人じゃないか。

「帰ったら、父さんと母さんにも話すよ」

「ウブネさんのことも？」

「ああ。これから一緒に住むからね」

「よろしくお願いしますね」

ウブネさんは目を細めた。その顔になんだかどきどきしてしまつて、目を見れなかった。こんなに綺麗なウブネさんを見たら、父さんと母さんは何と云うだろう。ウブネさんはとても穏やかな人だから、トラブルにはならないと思う。となると問題になるのは兄の方だ。兄は父さんと母さんに謝るべきだ。それで、仲直りをしたら前みたいに「ご飯を食べよう」。

「ご機嫌すぎる朝食を食べ終えて、僕たちはホテルを出た。お代は全て兄が払ってくれた。お金は大丈夫なのか聞くと、俺がボランティアで研究してたと思つてるのか、と笑われた。兄はプロジェクト内きつてのプログラマーだったらしい。収入についてはあまり聞かなかったが、そこそこもらつていたと言ふ。ご飯食べに行こうと言われてここを予約したのも、収入が増えたからだろう。」

「さ、父さんと母さんに会いに行こう」

兄はウブネさんの手を引いた。

「ワタシ、マスターのお父様もお母様も写真でしか見たことがありますから、楽しみです」

ウブネさんはワクワクした様子だった。

「ああ、前に写真をインプットさせたね。父さんも母さんも、良い人だよ」

おそろく僕のことインプットされていたのだろ

う。なんだかんだで兄は家族を思つていたことが伺える。

「はい……！ もちろん、ユウマさんも素敵です」

突然僕の方を向くのでびっくりして固まつてしまつた。

「いや、僕は……」

「はは、謙遜すんなよ。優磨はものすごく優秀で、やさしくて、最高の弟なんだから」

最高の弟なんて、初めて言われた。恥ずかしさと嬉しさで顔が熱くなつた僕は、優しく微笑む兄から目を離せなかった。

「にい、さん」

「マスター……！！」

兄が顔を歪めながら倒れた。それはやけにゆつくりを感じられて、時間が止まってしまうかもしれないと思つた。兄がコンクリートのタイルに打ち付けられた瞬間、時間は元通りになつて、車も人も当たり前のように通り過ぎていった。兄の肩から血が溢れて、周辺が暗赤色に染まつたところで、ようやく人々が騒然とした。僕はその場に座り込んで、震える体を抱きしめていた。さっきまで熱かつた顔が、驚くほど冷たい。

ウブネさんはこの世の終わりみたいな顔で周辺に助けを求めていた。街の人々は献身的で、すぐに救

急車を呼んでくれた。ウブネさんはホテルからもらってきたタオルで止血を試みていた。

「案外若いのね」

「あとは彼女を暴走させるだけだ」

どこか遠くでそんな声がして、そつと顔を上げた。兄を狙って撃ったやつがいるのか。そんな、ドラマみたいなことがあつていいのか。そいつらを見つけたようとしたが、あまりにも人が多過ぎた。野次馬はどつか行けよと思つたが、足がすくんでしまつて立ち上がれなかった。これでは怪しいやつを見つけれない。

「ユウマさん、どうかしましたか。まさかユウマさんもお怪我を……！」

「いや、ちがう。ちがうんです……ただ、声が聞こえて」

ウブネさんは首を傾げた。声、ですか……と呟くと、目を閉じて耳を澄ませた。

「……マスターを撃った犯人が近い、ということですね」

ウブネさんは僕に耳打ちをした。ゆっくり頷くと、ウブネさんは立ち上がった。

「マスター……いえ、シュウトさんをお願いします」
ウブネさんは僕に兄を託すと、人混みの向こうを抜けていった。彼女の目の奥は鈍く光っていた。ウ

ブネさんが立ち去ると救急車がやってきて、僕は同乗することになった。兄のカバンを抱きしめながら、救急隊員の質問に答え続けた。母に電話をかけると、搬送先の病院で合流することになった。僕は目を閉じて、息苦しさに堪え続けていた。兄の呼吸がゆっくりになっていくのに、僕の呼吸は荒かった。パニックを起こしているのだろうか。上手く息が吸えなくて苦しい。救急隊員が僕の肩を優しく叩いてくれたが、それでも意識は朦朧げだった。

Pulse社が開発したpulse-dollには、欠陥がある。主人に多大な危害が加わると、暴走状態を引き起こす。U-boneもその機能を携えていた。はずだったのだが、マスター……高瀬秀翔は、あらかじめその機能を解除していた。おそらくやつらは、ワタシを暴走させることを目的としていたのだろう。ワタシだって、暴走して彼らを木っ端微塵にできたらと思う。でも、マスターが望まないことなら……ワタシは、マスターが与えた自我を、保たなければいけない。「……マスターを撃つたのは、あなたですね」
彼らは現場の近くにいた。くるりと振り向くと、ニタリと気味の悪い笑みを見せた。マスターを撃つて危険に晒しておいて、なんて顔してるんだ。ワタシは拳を握りしめて、歯を食いしばった。

「アナタから私たちの元に来てくれるなら、話は早い。アレの準備を」

リーダー格の女が合図をすると、男がチップを取り出した。

「コレがあれば忌まわしいプログラムを解除できる……でしょ？」

「マスターがワタシに施した暴走制御プログラムは、忌まわしくなんかありません……！」

マスターは、たとえどんな理由があってもロボが周囲に危害をもたらすことはあつてはならないと思つて、暴走制御プログラムを組んだのだ。暴走と名付けられている以上、ターゲット以外の人々の安全を確保できるかは定かではない。多大な被害と自分の命を秤にかけて、マスターは他大な被害への対処を優先事項としたのだ。

「あら……じゃあ、そのマスターを殺そうとした私たちを生かしておく方が、正しいというの？」

ワタシは口をつぐんだ。ああ、これが。マスターも言っていた倫理と道徳の問題だ。マスターに危害を加えたやつを見逃すということは、こいつらを肯定するということだ。数多のプログラムの中から、こいつらを攻撃する根拠を探してみたが、なかった。マスターは、ワタシに攻撃手段を与えていなかった。

ねえ、どうしてでしょうか。ワタシはこんなにも、怒りに満ちているのに。それを放出する方法が見当たりません。マスター、どうしてですか。

「ああ、可哀想に……ねえ、アナタがどうしたいか、手を取るようにわかるの」

欲しいのはコレでしょう、と手招きされる。畏れだとかわかってはいるのに、手と足がそちらに向いてしまふ。こいつらを、どうにかしなきゃ。これは破壊じゃない。危険なことでもない。絶対にやらなきゃいけないことなんだ。マスターの望みではないかもしれないけど、それでもワタシは、やらなくちゃいけないんです。

「アハ！　なんて素晴らしい慈愛の精神……ロボとは思えないわ。人よりも人らしい」

黒く、鈍く光るチップに手を伸ばした。これを飲み込めば、腹部でスキャンされてプログラムが上書きされる。もしかしたら、自我を失ってしまうかもしれない。でも、こいつらをどうにかしなきゃだから。

ごめんなさい、マスター。

「っ、ウブネ！」

病室で眠っていた兄はいきなり飛び起きた。僕は慌てて兄の体を支えた。兄は肩の痛みに気づいて、

身を縮こめた。

「兄さん、どうしたの……？」

「ウブネが、禁忌を犯す」

父さんと母さんは互いに顔を合わせた。先に口を開いたのは母さんだった。

「その……ウブネさんっていうのは誰なの？」

「……俺が部屋にこもっていたのは、研究を行っていたからなんだ。その成果がウブネ。ウブネは最新の人工知能を搭載した人型ロボットだ」

母さんは信じられないと言ったような顔をしていた。僕が口を挟む。

「本当なんだ。さっきまで三人でご飯を食べに行っていて……兄さんは、そのタイミングで誰かに狙われたんだ」

「そのウブネが、人々に危害を加えるかもしれない。多分、暴走制御プログラムが解除されたんだ」

どうやら、暴走制御プログラムとやらが解除されると、兄のスマートウォッチに通知がいくという。それに気づいて飛び起きることができたのは、その機能のおかげだろう。

これじゃあ、pulse-doll が実用化できなくなってしまう。ウブネは一体どうして、暴走制御プログラムを解いたんだ……と、兄がぶつぶつ唱えるのを見て思い出す。

「兄さんを狙った人は、ウブネさんの暴走を目的としていたんだ。でもウブネさんはそれができない。もしかして……解除「させられた」んじゃないかな」

兄はそれを聞いて頭を抱えた。父さんと母さんは何が何だかさっぱりという顔だった。僕だって正直、まだウブネさんが何者なのかわかっていない。兄がどういった経緯で開発に加わったのかも知らない。でも今はそれどころじゃなくて、ウブネさんを、どうにかしなきゃなんだ。

「ウブネさんの位置情報はわかる？」

「ああ……幸いこれは狙われてなかったらしい」

兄はカバンからタブレットを取り出す。ウブネさんの位置情報とリンクしており、アプリに表示されていた。ホテル近くから移動しているようだった。

「父さん、母さん……兄さんをお願い」

僕は兄からタブレットを奪取して走り出した。兄が待て！ と僕を引き止める声を背にする。父さんは途中まで追いかけてきていたが、追いつけなかったのか、姿は見えなくなっていた。タブレットの情報を元にウブネさんの元へ向かう。ウブネさんと僕の距離はますます近づいていった。まさか、ウブネさんは兄を探している？ 暴走しながら、兄を探し求めている？ となれば、このタブレットを持っている僕と合流できる可能性が高い。

——ウブネが万が一暴走した時に備えて、制御プログラムを組み込んでいる。

兄から通知があった。リンクをタップすると、先日僕が見た動画と全く同じものが出てきた。僕は走り続けて、ようやく、ウブネさんと合流を果たした。

「ウブネ、さん……！」

息を切らしながら彼女の名前を呼ぶ。彼女の目は深淵より暗く、自然光を鈍く反射するのみだった。無機質に光る目を見て足がすくむ。

「……なぜあなたが、マスターのタブレットを？」

暴走すると主人以外の情報が消えてしまうのだから。ウブネさんは僕が弟であることに全く気づいていないようだった。

「ウブネさんを、止めるため」

僕は一歩踏み出した。正直、すごく怖い。ロボが暴走したら人間じゃ太刀打ちできない。武装すらしていない生身の僕なんて、すぐにねじ伏せられてしまうだろう。

「……いかなる理由でも、マスターのタブレットを他者が所持していることは、マスターの危篤を意味します。大人しくマスターの居場所を吐きなさい」僕はウブネさんを睨みつけた。兄から共有されたリンクを開いて、再生ボタンを押す。これでダメだったらどうしよう、と弱気な考えがよぎる。でも、

ウブネさんを開発したのは他ならぬ兄だ。兄が残した最後の制御プログラムなら。

「……それ、は」

ウブネさんの動きが止まる。目に光が戻っていくのが見えた。新月が満月に変わっていく。

デিজィーベル。初めて機械が歌った曲。兄はこの曲を知っていたのだ。ウブネさんはその場に崩れ落ちた。

「あ、あ……ワタシは、なんてことを」

どうやらこの曲が制御プログラムだったらしい。

現実思考の兄にしてはロマンチックだ。

僕はほっとして、ウブネさんに駆け寄った。ウブネさんは顔を手で覆って震えていた。暴走の影響が体が熱かったが、すぐに冷めていった。

「あーあ、つまんない」

振り向くと、怪しい女がいた。ウブネさんは僕の前に出て僕を庇う。どうやらこいつが、兄を狙ったやつらしい。

「もう二度と惑わされません」

ウブネさんの言葉に女は高笑いをあげる。不愉快な、悪意を含んだ笑いだ。

「アハ！ それでプログラムを克服した気になったの？ バカだねえ」

「上書きなんていくらでもできる。アップデートと

「いう言葉を知らないのか？」

女の後には男が続く。暴走を制限されたウブネさんじゃこいつらはどうにかできない。アツプデートなんてされてウブネさんがまた暴走したら、僕はもうしたらいんだ。

「……絶対に許しません」

ウブネさんは歩き出す。その一步一步が怒りに満ちているのがわかった。僕はぐくりと唾を飲んで、ウブネさんを見守っていた。

「何よ今更。無力化されたアナタに何ができるって言うの？」

「pulse-doll……もとい U-bune は人々に危害を加えることを禁じられています」

——でも。これはワタシの選択です。ワタシ自身が考え、選び取った結果です。マスターの望んだ行動ではないかもしれませんが……ワタシは。

「ウブネは、あなたたちを許しません」

「いたぞ！ あいつらだ！」

警察官が大勢やつてくる。男女はあつという間に取り押さえられた。僕は座り込んだまま啞然としていた。ウブネさんは一体、何をしたんだ？

「ワタシが危害を加えることが禁じられているのなら、ワタシが呼んだ誰かに罰を与えてもらうことが最善です」

ウブネさんは僕に向かってウインクをした。兄を狙った男女は現行犯で逮捕された。ウブネさんの録画機能のおかげで、警察がスムーズに動いたらしい。

「さあ、マスターの元へ行きましょう」

ウブネさんは手を差し伸べてくれた。僕はその手を取って立ち上がる。

「本当に心配したんだからな」

後日——退院した兄は回鍋肉を食べながら言った。僕とウブネさんが無茶をしたことに相当お怒りらしい。僕とウブネさんは顔を見合わせて笑った。

「ウブネちゃんもお食べ」

母さんがウブネさんの前にご飯と味噌汁を置いた。

「ああいや、ワタシはロボなので……！」

「秀翔、ウブネちゃんに摂食機能はつけられないのか？」

父さんが言うのと、兄は天を仰いだ。

「まあ確かに……液体は難しそうだけど、固形物ならイケるか……？ 摂取した食物の行先についても考えないと……」

「ワタシは食卓を囲めるだけで十分ですから……！」
ウブネさんが顔を赤くして言った。高瀬家は前よりずっと賑やかになった。兄はまた忙しくなるみたいだけど、もう寂しい思いはなくて済みそうだ。